

日本の〈同質〉文化とアメリカの〈異質〉文化

— 異文化理解の観点から —

森 光 有 子

1. はじめに

今、「文化」ということばがさまざまな問題の重要なキーワードになってきている。青木(1998)によると、「政治や経済を円滑に運ぶためにも文化が無視できない、文化をうまく理解して対処しないと政治や経済も動かない」し、また「政治も文化だし、経済も文化的なファクターを無視してはやっていけない」のである。たとえば、日米経済摩擦にしても、文化というファクターが大きく関わっていると考えられる。

しかし、このような大きな問題ではなく、我々が日常遭遇する身の回りの小さなことにも文化の違いは大きく影響する。たとえば、人に贈り物を渡す際の「つまらないものですが」ということば、口癖のように軽く使う「すみません」ということば、親が自分の子どものことを他人に対して言う「うちの子はしつげがなっていないから」というようなことばなど、例を挙げればきりが無いが、これらの日本では日常当たり前のように使われていることばに日本人以外の人々が接したとき、彼らは奇異に感じたり、誤解したり、解釈できなかつたり、という現実もある。このようなことばや態度には、日本文化の特性が表われ出ており、日本文化に属さない人々にとっては理解しにくいものなのである。逆に、日本文化に属している我々が他の文化の特性に接したときには、それらが我々の理解を超えることも随分ある。

日本は島国であり、日本人は単一民族であるので、他の文化の理解できない特性は無視したり、特に意識しないでおくこともこれまでではできた。自国の文化以外にあまり接触することなく日常生活を送ることができた。しかし、このような時代は終わった。交通手段が発達し情報化社会が進むと、世界が狭くなり、他の文化を身近に感じたり、他の文化についての情報を簡単に得ることができるようになる。すると今まで当たり前だと思っていた自文化が当たり前ではなくなり、いろいろな文化のうちのほんのひとつに過ぎないのだと認識せざるを得なくなる。そして他の文化を、また自文化と他の文化との違いを意識することになる。

異文化を意識し理解することがいろいろなレベルでの世界との交流において非常に重要になってきた今、まず自文化を知り、理解することが不可欠である。また、異文化を理解することによって我々は自文化に対する客観的な目を養うことができ、そしてそれが自文化の再発見につながることも多い。以下、本稿では、まず「文化」の定義づけを行い、そして日本

文化の特性の一部を他文化との比較により見てみることにする。

2. 文化とは何か

文化とは、宗教、民族、言語、生活様式、行動の仕方、価値観、ものの考え方・捉え方などを含むとは、一般的によく言われることである。ここで、少し長くなるが、Brown (1963) による文化の解釈を引用してみたい。Brown によれば、

It (*i.e.*, Culture) refers to all the accepted and patterned ways of behavior of a given people. It is a body of common understandings. It is the sum total and the organization or arrangement of all the group's ways of thinking, feeling, and acting. It also includes the physical manifestations of the group as exhibited in the objects they make — the clothing, shelter, tools, weapons, implements, utensils, and so on.

であり、また

Our culture is our routine of sleeping, bathing, dressing, eating, and getting to work. It is our household chores and the actions we perform on the job; the way we buy goods and services, write and mail a letter, take a taxi or board a bus, make a telephone call, go to a movie, or attend church. It is the way we greet friends or address a stranger, the admonitions we give our children and the way they respond, what we consider good and bad manners, and even to a large extent what we consider right and wrong.

である。そして、この「文化のおかげで、我々は毎日をなんとかつつがなく過ごすことができる。なぜなら、我々と我々が出会った人とが同じものに対して同様の意味づけをするからである」と言う。このように考えると、文化とは我々の生活のすべてであると言えよう。

しかしよく考えてみると、文化はいくつかの種類に分けられる。まず第一に考えられるのは、人間の文化である。人間の文化で意味していることは、人間であれば誰もが共有していると考えられる文化である。たとえば、お腹が空けば何かを食べる、寝るときには身体を横たえる、楽しいとき、うれしいときには笑い、悲しいときには泣く、といったようなことが考えられる。

第二に、社会的な取り決め、約束事や習慣を共有していれば理解できる文化がある。たとえば、交通信号や標識の表わす意味を社会的約束事・ルールとして認識しているといったような例がある。このような社会的約束事の中には多くの国で共通して取り入れられているものもあるので、そういった約束事はこれらの国々の人々の間では共有されている文化であると言える。

しかし、他の国や文化の人々に共有されるのが困難なものもある。これがもう一つ考えられる文化、すなわち、ある特定の社会集団の中でしか理解されない文化である。ある社会集団の中では価値を認められる考え方であり、行動の仕方であり、習慣であっても、異なる社

会集団に属す人々はそれらに何の価値も与えないかもしれない。なぜこのような物を食べるのだろうか、なぜこのような味付けなのだろうか、なぜこのような物を着ているのだろうか、なぜこのように大きな声で話すのだろうか、なぜこのような話し方をするのだろうか、といった疑問があるかもしれない。上述の「つまらないものですが」や「すみません」というようなことは、この種類の文化として含めることができるだろう。

このように考えるとき、社会集団は一つの国という場合もあるし、また一つの国の中のさまざまな集団という場合もあり得る。地域によって分けられる集団、性別によって、年齢によって、また職業によって構成される集団などが考えられる。従って、たとえば年齢の異なる層の集団に属す人々は、お互いに異文化に住む人々なのかもしれない。

以上、文化には3つの種類が考えられるということを示したが、次のセクションでは、第三番目の種類の文化、すなわち、他の文化に属す人々にはなかなか理解できない種類の文化を考えていきたい。しかしその前に、触れておくべきことがある。

先にも述べたように、日本は単一民族国家であり、少なくとも最近までは、日本人は他の民族、他の文化との接触をあまり意識しなくても日常生活を送ることができた。正確に言えば、歴史的に見て、日本は過去に他の文化を多く取り入れてはきたけれども、それらを日本文化として完全に消化してきてしまったため、異文化を異文化として意識する必要はあまりなかったのではないかと考えられる。青木（前述）は、「日本は外来文化を非常に広く受け入れる、世界でも珍しい社会であり文化である」と「同時に、日本の文化の特性として、外来文化を自分たちが必要だと思うところは全部取り入れてしまうが、そうすると本来の文化が持っていた形を全部なし崩しにして自文化に同化させてしまう」と主張する。また彼はこれらを、日本文化の「受容性」と「(同化、あるいは、消化による)閉鎖性」あるいは「自己完結性」と言っている。

異なるものをそのままの形では認めず、自文化に適合するように変化させて消化してしまうというのは、異文化や異なるものに対する無関心、無理解につながりかねない。異なるもの・異質なものを認めず、皆同じなのだと思える傾向が強まるのではないだろうか。

確かに日本人は単一民族であり、故に、日本に生まれ住んでいるのであれば皆、日本の国籍をもち、日本語を話し、目の色も髪の色も皮膚の色も同じで当たり前だと思っている人が多い。しかしそのため、目の色、髪の色、皮膚の色という生物学的特徴と、国籍、言語、宗教といった社会的遺産とでもいうべきものとをきちんと区別せずに考えてしまうことになりがちである。前者の生物学的特徴は人種（race）のカテゴリーを区分する際に用いられる身体的特徴であり、生まれつきのものである。一方、国籍、言語、宗教、および習慣、モラルなどは社会的・文化的に受け継がれていくものであり、そこに生まれつき備わっている遺伝的な要素は含まれない。個人個人が生まれた後に学習したり、習得したりする文化の一部である。前述の Brown が挙げている文化の例も、すべて個人個人が生後、習得していくもの

である。文化はその文化に属す人々が受け継いでいく社会的パターン、社会的遺産や伝統であり、生得的な生物学的特徴からは切り離して考えられなければならない。ある人がある人種に属すということとその人の国籍、言語やその他の文化的パターンとはいかなるかわりも持たないのである。

3. 日本文化とアメリカ文化の特性

異文化に関心を持ち理解するためには、まず自文化に対する関心と理解を示さなければならないし、また異文化を理解することによって、自文化に対する理解がますます深まるといえる。「イギリスしか知らない人はイギリスを知らない」という考えは、¹ いかなる社会、いかなる文化にも等しく当てはまる。日本しか、あるいは日本の文化しか知らない人は、本当の意味では日本（の文化）を知らないし理解していないのである。日本の文化を理解することによって異文化への関心が高まり、また異文化に対する理解が深まれば、それは新たな自文化の発見にもつながる。そこで、日本文化への理解を深めるために、その特性を他の文化の特性と比較することによって浮き彫りにしたい。

日本文化の特性と考えられるものは数多くあるが、本稿ではそのうちの一部に焦点を当てて考えてみたい。日本文化と比較する対象となる文化として、多民族国家の代表であるアメリカの文化を考える。² また、文化の特性として述べられることは、現在その傾向が強いということであって、いつの時代においてもそれが絶対的な真実であるということではない。

3.1 同質と異質

セクション2で、日本文化の「閉鎖性」は異なるものへの無関心、無理解につながりかねないし、また異質なものを認めず、皆同じで当たり前だと考える傾向が強まるのではないかと指摘した。目の色、髪の色、皮膚の色が皆同じであるのと同じように、何もかもが同じであり、またそれが良いことなのだと思える傾向が強まる。確かに、小さい頃から、自分を殺して集団に溶け込むこと、そして集団の一員として、皆と一緒に協調性をもって物事に取り組むことの大切さを、親や教師から言われ続けてきた人が多いのではないだろうか。

その結果なのか、たとえば、同じような服装や化粧をしている人が多いし、あるブランドのバッグが流行すれば、それに多くの人が群がる。海外にあるそのブランドの本店などは日本人客でごった返し、品切れになることもあると聞く。レストランに行けば、「私も……」と自分より先に注文した人たちに合わせる。ひとりだけ違うものを頼むと、なんだかんだと言われるからである。小学校などの入学式や卒業式で自分の子どもにどのような服装をさせるかでも、他の子どもたちと同じ服装に合わせようと、母親たちは情報収集に大変だという話も聞く。多くの中学校や高校では、制服のみならず鞆や靴まで統一させているし、またかつては、髪の長さや型まで規制しているところもあった。「出る杭は打たれる」で、目立たな

いようにしておくのがよいのであろうか。

日本の同質文化の特性が如実に表われ出ている例を最近の新聞記事から2つ挙げてみよう。まず一つは、今年の夏の高校野球の甲子園大会において、日本高野連がアルプス席での応援について厳しく規制したという記事である。³ アルプス席での応援も「あくまでも学校によるもの」であって、一般人も「各校の指揮下にある」としている。高野連事務局長は「学校が一丸で応援するのが、理想的な姿。バラバラではなく、(一般客も)各学校の応援のやり方に合わせてほしい」という談話を発表している。「バラバラではなく」皆一丸となって同じ応援をするのが理想であり素晴らしい、そして自由でそれぞれが異なる応援をするのは迷惑という考えのようである。個性の尊重を理想の姿と唱えているのをよく耳にする昨今、この例のような、応援する高校に直接関係を持たない一般客までもがある一つのパターンに合わせなければならないという規制、あるいは「高校野球らしい応援を」するように「教育的指導」を受けるとするのは、特徴のない画一的なものしか生み出さないという点でいかなるものであろうか。また「高校野球らしい応援」という表現にも見られる「らしさ」をよしとする日本人は多く、故に「子どもらしく／男子(女子)らしく／高校生(中学生／大学生)らしく」などと、ある型・あるパターンにはまった行動を求められる場合も多いが、これも型通りの同じような人間しか生み出さない。

2つ目の例は、文部省の検定で不合格になった高校家庭科の教科書に関してである。⁴ 高校卒業後あるいは成人期になってどのような人生を送るかについての考え方は、個人によって、また同じ個人でも年齢や状況によってさまざまであるはずである。ひとりひとり考え方が異なっていて当たり前であるし、同じ個人の中で考え方が変化していくのは一種の人間としての成長と考えられる。

しかし、このような内容に結びつくテキストは不合格とされた。「成人期には……だれと(単身も含め)どういった形で暮らすかを、多くの選択肢から選ばなければならない」という記述などは、「文部省が描くモデル家庭」からはずれているため否定された。生き方に「多くの選択肢」があることは悪で、皆「良き家庭人」を目指すことを目標としなければならない、という型に無理矢理はめ込もうとしている。人間の生き方は千差万別で、またそれらの生き方に優劣や合格、不合格の判定は不要である。

これに対してアメリカの学校のテキストは、州や地域によって異なるのが当然である。またイギリスの学校も、公立か私立かで、また校長によって、学校の方針、授業内容、授業形態、授業方法などさまざまであるし、さらに住居がどの教育管轄区に属するかによって、小学校への入学時期、入学年齢が異なる。このように、授業やテキストの内容、学校の方針など、個々の学校によって違って当たり前という考え方は、4月の桜の季節になると、同じ年齢の人が一斉に入学したり同じ新学年でスタートしたり、全国のどの地域でも同じような内容のテキストが使用されていたり、また夏休みなどの開始も終了も(ほぼ)同時、とい

う日本の学校には馴染まない。

さてこれは、皆一緒に当たり前という日本文化の特性と、皆違って当然というアメリカ（やイギリス）文化の特性の違いがはっきりと示される例であるが、しかし、なぜそれぞれこのような特性を持つようになったのであろうか。

日本について考えられることは、日本は歴史的に農耕社会であったということである。村の人たちが皆で協力して、限られた土地を耕し農作物を作る。そういう状況で大切なのは、お互いに協力し合うこと、皆が一致団結して集団として活動することであったと考えられる。「村八分」ということばが示すとおり、ある村の集団に即していけない人は、その村から排除されるということもよくあったようである。このような集団を中心とする社会では、集団の和が第一に大切なことと考えられ、個人の要求、願望などは抑制されなければならなかった。そして、個人を主張することは利己主義、自己本位と見なされ、個人を制することが価値のあることと高く評価されるようになった。故に、高校野球の応援でも高校卒業後の人生の送り方でも、個人の主張はわがままあるいは自己本位として許されず、「らしく」ないものは排除されるということになるのである。

それに対して、もともと狩猟民族であったアメリカ人やヨーロッパの人々は、基本的にひとりでの行動を中心としていたと考えられる。個人が大切に、特にアメリカ人の場合、開拓精神が旺盛なため、たとえ他の人と同じことをする場合でも、自分を開拓者だと考えたがる傾向にあるようである。

アメリカで生まれた野球が日本に入ってきたために、狩猟型あるいは開拓型から農耕型に変わったのではないと思われる部分がある。たとえば、日本では守りの体勢に入るために、投手が敬遠のフォアボールを投げて打者を一塁に歩かせるということはふつうであるが、アメリカではそれは unfair な態度と受け取られることが多い。ふつう、投手は逃げずに真っ向から挑戦していく。アメリカの野球が今の形を成す前は、投手は打者の打ちやすいボールを投げなければ unfair であったということである。つまり、ゲームはボールを打つことから始まるのである。このような背景も影響して、日本の野球と異なり、アメリカの野球の場合には、ボールのカウントを先に言い、その後でストライクのカウントを言うということである。⁵ これらのことは、今ある物を守っていくという農耕文化と、新しい物をどんどん取っていく、攻撃していくという狩猟あるいは開拓文化との考えの違いを反映しているように思われる。

またアメリカは多民族国家であるので、いろいろな民族から成り立っており、従っていろいろな文化が見い出される国である。文化の衝突ももちろんあるだろうが、しかし基本的に、いろいろな文化がそのままの形で共存している、異質なものが異質なままで共存している国だと言えるだろう。このような状況では、皆違って当たり前、お互いに異質であって当然という考えが生まれてくる。そして、異質なもののぶつかり合いによってエネルギーや創

造力が生み出されると考えるのである。

これは人類学でいう「族外婚」の概念と結びつく。人類学では、人間社会は、同じ一族内で結婚を繰り返す「族内婚」の状態から複数の集団間での結婚が行われる「族外婚」の状態になって、今日のように発展してきたといわれている。⁶ 異質なものを取り入れることの大切さを言っていると思われる。

時が流れ、やがて21世紀を迎えようとしている現在でも、日本文化は依然として異質なものの理解が苦手であるように思われる。異質なものに目を向け、それとぶつかり合うことがエネルギーを生み出し、発展につながると考えられるのにである。やはり、今日まで日本人の生き方、考え方を規定してきた日本文化をそう簡単には変えることはできないのであろう。

この日本の同質の文化はさらに、「内」と「外」という考え方につながる。3.2では、この「内」と「外」の文化について考えてみることにしよう。

3.2 「内と外」とボランティア

日本人はよく、回りの人々を自分と同じグループ「内」の人とそのグループの「外」の人とに分けると言われる。また、人にだけでなく回りの物に対しても同様の態度を取り、「内」の物と「外」の物とを区別する。この「内」と「外」の輪の大きさや構成員は状況に応じてさまざまに変化するが、一例を挙げると、たとえば自分の知人は「内」側に、知らない人は「外」側に属す。

このこと自体は特に取り立てて言うほどのことではないのであるが、問題は、日本人が「内」のグループの人には大変気を使い大事にする一方で、「外」の人には無関心で無遠慮になる傾向があるということである。海外旅行に出かけた日本人の団体が、「旅の恥はかき捨て」とばかりに、レストランでもどこでも構わず大声で話をしたり、禁止されている場所でも平気で写真を撮ったりたばこを吸ったり、というマナー違反の行為をするという種類の話はよく耳にする。車道を横いっぱい広がって、大声で、というより叫ぶような声で話をしながら歩き、何台もの車をストップさせてしまっていたり、飛行機の中で、注意を受けているにもかかわらず、いつまでも着席せずに仲間同士でわいわい騒ぎ、離陸をかなり遅らせてしまったりという光景は、実際に目にした光景のほんの一部である。自分たちのグループ「内」の人が楽しければ、知らない「外」の人が迷惑を被っていても関係がないということのようである。

ここで、日本のある放送局が行った興味深い実験を紹介しよう。⁷ 朝の通勤電車でぎゅうぎゅう詰めに押し込められている人たちを集めて喫茶店に招待し、しばらくの間お茶を飲みながら会話をしてもらった。その後、その人たちに再び満員電車に乗ってもらった。すると、お茶を飲みことばを交わすまでは平気で体をくっつけ合い、遠慮もなくお互いに押し合っ

いた人たち同士が、今度はお互いを意識し、必死で距離を保とうとした。なぜこのようなことになるのだろうか。それはやはり「内」と「外」の考え方で説明される。お互いに知らない者同士、「外」のグループの者同士であるときには、足を踏もうと荷物が当たろうと、まるで自分には関係ないことのように謝りのことばもなく無関心であるけれども、いったん知り合いになって「内」のグループに属してしまうと、お互いに気を使い、「すみません」とか「大丈夫ですか」というようなことばを用い、迷惑をかけないようにしようとするということなのである。

もう一つ考えてみよう。「ボランティア」ということばがある。ボランティアの活動にはもともと、故マザー・テレサの奉仕活動に代表されるような、見返りを期待しない無償の愛—アガペーというキリスト教の精神が背景にある。松本（1994）は、日本人は自分に直接「関係のない外の人を助けるために行動を起こそうなどとは思いつかない」と言うが、ボランティアの行いはまさにこの自分に直接関係のない外の人をも助ける行為である。「内」の人であろうと「外」の人であろうと、自分への直接の関係の有無にかかわらず、誰に対してでも向けられる行為である。日本には「恩」や「恩返し」ということばがあるが、松本（前述）によれば、「日本では恩を返すことが義務」になり、また「恩の対象が恩を受けた相手に限られている」。つまり、恩を受けたらその相手に対してのみ恩を返すという、「内」の人へのみ向けられたものである。この日本的恩返しは、どのような人に対しても向けられているボランティアとは異なる。

引越しをしたときに見られる典型的状況を日本とアメリカとで比較してみよう。日本では引越しをしたとき、先にその土地に住んでいる人たちが家の中などからどのような人が引越してきたのかとじっと見てはいるが、決して自分たちから声をかけたり挨拶したりはしない。引越してきた人たちはその土地の住人からすると、まだ「よそ者」つまり「外」の人なのである。故に、住人は気にはなっても自分たちの方からかかわりは持たない。引越してきた人がちょっとした品物を持って近所に挨拶回りをしてはじめて、その土地の人たちの「内」に仲間入りすることができる。

それに対して、アメリカで引越しをすると、先にその土地に住んでいる人たちが新しく来た人たちの所へ来て自分たちの名前や家を教えたり、わからないことがあったら教えてあげると声をかけてくる。ここにはもちろん「内」も「外」もない。困っている人、助けを必要としている人がいれば、行って自分から声をかけ手を貸すというボランティア精神が見られる。これは、自分に関係のない「外」の人を助けるために行動を起こそうとはしない日本人と、困っている人がいれば、それが誰であろうと手をさしのべるというアメリカ人との違いを表わしている例である。

最近、日本でも「ボランティア」ということばをよく耳にするようになったし、実際に活動をしているという人も増えた。しかし、これが日本特有のやり方、すなわち、自分たちに

必要な部分、都合の良い部分を取り入れ、それを日本のやり方に合うように変形し、本来の形や意味を台無しにしてしまうということになってしまっていないか疑問が残る。

ところで、日本人の行動の基準は「恥」、つまり自分と同じグループ「内」の人たちに対して恥ずかしくないかどうかということにあるといわれることが多い。⁸ 故に海外旅行のときも満員電車の中でも、自分のグループ「内」で恥ずかしい思いをしなければ、知らない「外」の人にどう思われようと構わないとなる。しかし、グループ「内」での恥や失態はそのグループから排除されることにつながる場合もあるのである。これは、3.1で触れた「村八分」の考え方である。

広淵升彦（1998）は、日本のやり方が一番で、停滞し活気のないヨーロッパにはもはや学ぶべきものは何もないと言う日本人ビジネスマンに対して、次のように言う。「でもこの国では、外国人である我々でも意外に暮らしやすいなにかがあるんですよ。…『この社会を律する大きな原理原則にしたがってさえいけば、小さなことは気にしなくても、生きていける』といった安心感があります。日本ではいくら法律を遵守していても、もっと目に見えない細かい決まりがいっぱいあって、そこからはみ出ると生きていけないところがあるじゃないですか。容疑者は法によって裁かれるだけでなく、ときにマスコミによる情緒的な『リンチ』さえ受けます。原則は状況によって変わるし、法律よりも『空気』や『情緒』の影響力のほうがつよい日本という社会は、ある意味で非常に怖い社会です。…日本があまりにも細かい目に見えない壁を取り払わないかぎり、日本的システムや慣行が世界の規範になるなんてことはありえません」。⁹

日本では、社会からはみ出ないように、またグループから排除されないようにするためには、社会の原理原則や法律よりも情緒や目に見えない小さなことに気を使い、グループ「内」で恥をかかないように、失態を犯さないようにしなければならないのである。それに対して、アメリカ人の場合、行動の基準は神に対する「罪」の意識である。¹⁰ キリスト教的精神が背景にあるのであるが、自分が神に対して罪を犯していないかが基準になる。罪を犯したかどうかは良心に照らして自分で判断し行動する。自分が罪を犯したと判断すれば、自ら懺悔をし神の許しを乞う。そこには空気や情緒は無縁である。

日本の「恥」の文化がよく表われ出ている最近の新聞記事を一つ紹介しておこう。¹¹ ある省庁の「背任容疑だけでもうんざりなのに、こんどは証拠隠滅の疑いが濃い」ことに言及して、「〈恥の上塗り〉とはこのことだ」としている。さらに、その省庁の内部文書については「〈恥も外聞もない〉文書だ」と述べている。背任容疑や証拠隠滅は、間違いなく「罪」であるにもかかわらず、それに対して「恥の上塗り」というように「恥」ということばを用いている。このことは事件の当事者でない第三者や物事を客観的に捉えなければならない立場にある者までもが、「罪」に対して「恥」の感覚しか持ち合わせていないということを示している。

また自分の罪を認めた者が、属していた集団の信頼を損ない皆に迷惑をかけたと詫げる例が多数あるが、このことばかりは当事者の「罪」の意識を感じ取ることはあまりできない。日本の官僚や政治家に代表されるように、罪を犯していても罪の意識はなく、世間にばれて恥をかかなければそれでよいという感覚、世間にばれなければどんな悪事をはたしても構わないという感覚は、アメリカの文化から見ると全く理解できないものではないかと思われる。

以上、日本文化の特性とアメリカ文化の特性の一部を見てきた。日本文化の場合には、皆同じで当たり前で異質なものは排除する、故に自分と同質のものが属しているグループ「内」のものには気を使い大切にし、異質なものは自分のグループの「外」にあるので無関心である、ということが特性として考えられた。それに対して、アメリカ（などの）文化では、皆違って当然であり、異質なものが異質なままで共存し、またそれらがぶつかり合うことによって創造性やエネルギーが生み出されると考えるということであった。

国際化、グローバリゼーションが進む現在、皆同じで当たり前で異質なものは排除するという日本的態度は、そして「内」と「外」という考え方は、これからの日本にとってマイナスになるのではないだろうか。日本人が日本の中でだけ生活をし、日本人とだけ付き合っていくのであれば、問題になることはないかもしれない。しかし青木（前述）は、異質な文化をもつ人々の集合が創造的な活動を生み出し、その国や都市の安定と繁栄をもたらすが、逆に、同質の文化をもつ人々の集まりだけでは創造的な活動は消え、その国や都市は没落し傾いてしまうと言う。この観点からすれば、日本人が日本人と日本の中でだけ生活をし、異質なものは排除するという日本のやり方でよいのだとしてしまうことは、危険でさえある。それならばいっそう、この日本特有の性質は考え直されなければならないだろう。日本の文化は独立した、あるいは孤立した文化と捉えられることも多い中、見直されるべき部分を見直す努力を怠ることは、日本の世界との交流を妨げることになる。障害者問題に関して、日本は世界から遅れをとっていると思われる。依然として強い障害者に対する偏見や差別も、障害者は自分たちと同じでない、標準とは異なる異質なものである、故に自分たちのグループの「外」に属しているのだという考えから出て来ているのではないだろうか。よく皆「平等」でなければならないというが、多くの日本人にとっての「平等」は「皆一緒」という意味での平等ではないかと思われる。数年前ある新聞で、運動会の競走などでは皆手をつないで一緒にゴールするようにしなければ最後の子がかわいそうであるし差別である、という内容の投稿記事を見たことがある。確か小学校の教師からの投稿であったと記憶しているが、これは皆一緒でなければいけないし平等でないという感覚である。このような感覚あるいは発想に従えば、人間はひとりひとり皆違うのだということ、たとえば、走るのが速い子もい

れば遅い子もいる、あることが得意な人もいれば不得手な人もいる、ある人はこれは得意だがあれは苦手だ、しかしそれでいいのだ、という考え方は出てこない。この感覚は、皆同じことを同じだけでできればよいという考えや画一的な人間しか生み出さない。そしてこの感覚こそ、皆同じことが同じだけできて当たり前であって、皆と同じことができないのはだめだという差別を生み出すのである。

世界的ヴァイオリニストである川島成道氏は視力に障害をもっており全盲に近い。20歳を過ぎてイギリスに留学し、現在はロンドンを拠点として演奏活動を行う日々のものであるが、彼の「(ロンドンに来て学んだことは)人間の豊かさと、大きさです」ということばはよく考えてみなければなるまい。¹²

4. おわりに

人間は何人であろうと、個人であると同時に社会的生物である。自分の independence を保ちながら、もう一方で involvement も求める、というように2つの矛盾する側面をバランスを取りながら生きている。これは、独立した個人でありたい、他の人とは違う特別でユニークな存在でありたいと願う一方で、他の人と同じでありたい、他の人から理解されたいと願う人間の願望の表われである。¹³ 文化についても同様のことが言えよう。すなわち、あらゆる文化がそれぞれ固有の特性を持つ独立した文化であることを望むと同時に、共通する特性を持ついくつかの文化のうちのひとつであることを欲する。またいかなる文化もひとつの文化だけで孤立して存在するのではなく、他の文化と相互に影響を与え合いながらバランスを取り、はじめて存続していくことができる。

日本文化には見直していかなければならない部分があると先に述べたが、それは日本文化をだめだと否定しているのではない。もちろん日本文化にしかない良さはあるのだけれども、その良さは日本の中でだけ通用するものであって、世界の感覚からするとマイナス面になってしまうことが多いのである。日本文化の中では当たり前のことや美徳とされる特徴の多くは、アメリカ社会などにおいては不適応な態度とされたり、マイナスに評価されたりすることも実に多い。

国際化、グローバリゼーションが叫ばれている今、我々は自文化の中にだけ浸かっているのではなく、異文化ともっと触れ合うことが大切である。国際化の波の中で日本文化が存続していくためには、固有の特性を大切にしながらも、他文化と接触し相互に影響を与えていかなければならないであろう。またこれからの時代を生きていくために、われわれは自文化に関心と理解を示し、それを他文化の人々に発信し正しく理解してもらうことと同時に、孤立しているといわれる日本文化以外のいろいろな文化に関心を示し、世界の基準に目を向けていくことが重要である。人類学でいう「族外婚」と同様に、自文化にない異質なものを取り入れることによって、自文化がより豊かなものになっていくのである。

最後に、Brown が彼女の著書の中で述べていることを引用しておきたい。

Understanding the ways of other peoples is important also because such understanding increases our own self-knowledge and objectivity. We grow up with the assumption that our own way of doing things is the right way, if not the only way. Yet we are aware of many problems for which we do not know the solutions. A knowledge of the variety of ways in which other peoples have met similar problems gives us new perspectives and new clues to human behavior. "He knows not England who only England knows" applies equally to any society.

注

1. Brown (1963), *Understanding Other Cultures* より引用。原文は "He knows not England who only England knows" であるが、これはもともと Rudyard Kipling の詩 "The English Flag" の一節、"What should they know of England who only England know?" より取られている。なお、Brown の英文は本稿の最後にも引用されている。
2. 青木 (1998) はグローバリゼーションをアメリカ的な文化のグローバル化と考えている。彼はアメリカ文化は世界に通用する (形で表現される) 文化であり、アメリカは「大変普遍的なメッセージを発する魅力的な文化を世界に提供する」ので「世界の国々には非常に受け入れられやす」とし、またグローバリゼーションを「表面的に覆っているのは、現代アメリカの作り出した大衆文化あるいは生活様式」だと位置づけている。それに対して、日本は独立した文化圏と扱われることもある。この点からも、日本文化とアメリカ文化とを比較することは意味のあることだと考える。
3. 1998年8月18日付けの読売新聞の記事より。
4. 1997年6月の朝日新聞の記事より。
5. 1998年9月9日付けの読売新聞の記事を参照。
6. 青木 (1998) 参照。
7. 賀川 (1997) 参照。
8. 松本 (1994) 参照。
9. インターネットにより配信された記事から引用。
10. 松本 (1994) 参照。
11. 1998年9月16日付けの読売新聞の記事より。
12. 1997年7月の朝日新聞の記事より。
13. Tannen (1986) 参照。

森 光 有 子

参 考 文 献

- 青木 保 (1998) 『異文化理解への12章』 日本放送出版協会.
Brown, Ina C. (1963) *Understanding Other Cultures*. Prentice-Hall, Inc.
Huntington, Samuel P. (1996) *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*. Simon & Schuster.
賀川 洋 (1997) 『誤解される日本人』 講談社インターナショナル株式会社.
松本青也 (1994) 『日米文化の特質』 研究社出版.
Sakamoto, N. and R. Naotsuka (1982) *Polite Fictions*. Kinseido.
Tannen, Deborah (1986) *That's Not What I Meant!* Ballantine Books.

新聞:

朝日新聞

読売新聞

その他、広淵升彦氏の記事 (1998) など、インターネットによる配信記事.